

学校教育は「知識」を教えています。しかし企業で求めているのは「知恵」のある人財です。知識すら満足に教えられていないのに知恵までは無理でしょう。でも社会は「知恵」のある人財(材)がほしいのです。知恵をつけるには創造性が必要なのですが、そのような授業はほとんどありません。総合学習など課外授

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、ターナーで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

命の大切さ通し、学校教育に一石

業で教えたと言うでしょうが、子供たちには伝わってはいません。

企業内での研修の一つに創造性の研修があります。テーマを投げかけ、それを時間内に答えさせる。すると頭の回転がスムーズさを増していきます。

教育研修センターでの教員研修を見学して来ました。特に価値観研修は「地元を知り都会を知る」。つまり両方を知る人でなければ意味がないのです。ところが現在は都会から講師を呼ぶか、地元の先生が教えています。これでは本当の「価値観」は教えないと私は思っています。

「都会と地元の差」を説明できる人でないとこれは教えられません。ということとは両方に住んだことがある人ということとです。それも都会の視点から物が見えることができないと難しいです。

これまで島根に来てからいろいろな授業を経験しました。小、中学校では、創造性、価値観の授業、いのちの授業。高校では、キャリアカウンセリングに関し

て。大学では、ユニークな労務管理について。患者としては、患者が求める医療や島根県の患者サロンの活動・展開について。

これからしたい授業はいのちの大切さ、いじめ、自殺防止対策について、また現在の学校教育について。私は患者が医療現場、行政と一緒に汗をかきながら活動している視点と、保護者が学校現場や教育委員会を敵視している点があまりにも違いすぎることを憂えています。このような話のがん患者の私でないといけないと思います。

現在私が活動しているがんサロンをはじめとした一連の活動は、ボランティア的な要素が多いです。先日大熊由紀子先生とご一緒した際、ボランティアの意味の講義を受けました。ボルとはわき出るという意味で、ボランティアとは「進んでする」「放っておけない」。つまり本人の気持ちでさせていると解釈すべきだと。そこが地域作りの原点でしょうか。